

1 1

海部

あま市立七宝北中学校

カトウ ヒロキ
加藤 裕樹

分科会番号 12b

分科会名 自治的諸活動と生活指導(中学校)

研究題目

自他の人権を尊重し、豊かな心をもつ生徒の育成
－互いに認め合い、発信力を高める実践を通して－

研究要項

1 研究のねらい

本校では、めざす生徒像を「人として基を築き、自らを高める生徒」とし、教育活動を計画している。そして、その実現のため「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を目標とし、それらを中心に、特色ある学校文化づくりを進めている。本校の生徒の多くは、優しく真面目で、言われたことに対して素直に耳を傾け行動に移すことができる。また、与えられた役割にしっかりと取り組むなど、学校環境に対し受容性の高い生徒が多い。加えて、昨年度の実践により、集団の中でICTを活用し、意見の集約をする方法にも慣れ、多様な考え方に触れ、学び合い、互いに高め合っていくことに対して改善が進められた。

そこで本研究では、本年度の重点努力目標のうち、「①2軸3類4層構造を意識し、基本的な生活習慣の確立を基盤とした安定的な生徒指導」「②地域との関わりや学校・学年・学級を通じた関わりの中で育む人権教育」「③特別の教科道徳を中心とした道徳教育の確実な履行」を具現化することで、生徒の行動を変えていくことをねらいとする。そのための方法として、意見発表の場や生徒間の対話・議論の機会をさらに設けたり、協力して調べ学習をしたり、発表をしたりするなど、従来の方法を目標に合わせる形で行いたい。学習の状況に基づいた「指導の個別化」や「学習の個性化」を教師が理解し、「どの生徒でも分かる授業」「どの生徒にとっても面白い授業」になるように、校内現職教育を進め、本校の重点目標「確かな学力に支えられた『生きる力』」の育成につなげたい。これは、今年度になり職員の構成や年齢層が大きく変わったことへの対応も兼ねている。

以上から、「豊かな心」の目標の達成に向け、生徒指導提要の「生徒指導の実践上の視点」を意識した計画を立案し、実践することによって本研究を進めていきたい。そして、これらの取組を通して、主体的に考え、自らの思いを伝えられる生徒の育成を引き続き図りたい。

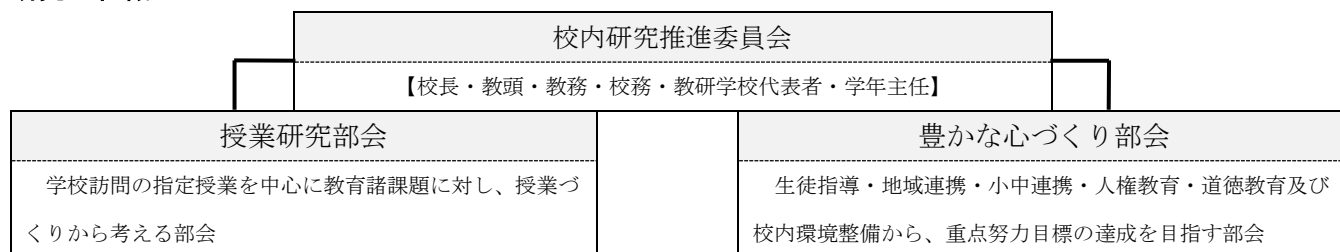
2 めざす生徒像

- ・ 自分の思いを大切にし、他者に伝える-発信力-とともに、他者の思いも大切にすることができる生徒
- ・ 互いの個性を尊重し、認め合い、高め合うことができる生徒
- ・ 人権について理解を深め、主体的に人権問題に関わることができる生徒

3 研究の仮説

- (1) 継続して行うことで、集団の中で意見を出すことに慣れれば、異なる集団においても発信力を発揮できるようになるだろう。
- (2) さまざまな取組を重ねることで、協働による創意工夫が生まれ、めざす生徒像に近づくであろう。
- (3) 提要「実践上の視点」の理解を含んだ計画を実践することで、主体的な取り組みをする生徒がより増えるだろう。

4 研究の組織



5 研究の方法

(1) 対象学年 全学年

(2) 手立て

① 主体的な挑戦をする場の設定（通年）

各教科の学習場面において、工夫されたグループ学習を積極的に取り入れることで、自分の思いを伝える経験を積み重ね、相手の意見に共感したり違いを認め合ったりすることができるようにする。

② 豊かな心を育む体験活動の充実

ア 福祉実践教室や職場体験学習などの学校行事を通して、さまざまな人々と出会い、その考え方や生き方に触れ、自分自身を見つめ直したり、多様な価値観を認め合ったりして、誰もがかけがえのない存在であることを体験的に学ぶことができるようにする。

イ 各体験活動において、目標をもたせる事前学習、振り返りをまとめさせる事後学習をそれぞれ設け、体験を通して感じたことや気付いたことを互いに伝え合い、共有できるようにする。

③ 『YDK（やれば・できる・北中生）プロジェクト2 ー広がれ 幸せの輪ー』の取組

委員会活動の時間を使って、各委員会でも他を大切にしている企画（1週間限定）を立案する場を設定することで、生徒同士の人権意識を高めるだけでなく、自分たちの思いや考えをもとに、よりよい自己決定ができる力を身に付けられるようにする。

(3) 人権教育に関わる行事等の年間計画

4月	人権教育の全体計画の立案	10月	学校祭（体育祭）、野外教室、道徳科研究授業
5月	校内美化活動	12月	人権週間、人権標語作成、人権アンケートの実施
6月	修学旅行、福祉実践教室、職場体験学習、 YDKプロジェクト2	2月	3年生を送る会
7月	YDKプロジェクト2	3月	1年間の振り返り
9月	学校祭（文化祭）、前期の振り返り		

(4) 検証

① 各教科の授業におけるICT利用の状況や振り返りプリントの記述、アンケート

② 各体験活動の様子やまとめの新聞の記述

③ YDKプロジェクト2の取組の様子や振り返りプリントの記述

6 活動の実際

(1) 各教科の授業実践 生徒指導の実践上の視点(1)(2)

① 3年生道徳の実践 「ソーシャル・ビューー ー見えない人と楽しむ美術鑑賞ー」

ア 本時のねらい

「ソーシャル・ビューー」の活動が大切にしていることを通して、異なる個性が関わることによって生まれてくる豊かさやおもしろさについて考える。また、互いの個性や立場を尊重し合いながら、共生していこうとする態度を育てる。

イ 授業の様子

資料から、視覚障がい者を交えて美術鑑賞をする方法があることを知り、3～4人グループになって、

疑似体験を行った。はじめは、「見える役の生徒」が見えたものを言葉にしていった。その言葉を「見えない役の生徒」が一つ一つ確かめるように耳を傾け、疑問に思ったことや質問を投げかけながら、互いの見え方や感想、イメージしたものを伝え合った。その活動から多くの生徒が同じものや色を見ていても、実際には人それぞれ、違う見方をしていることもあることに気付いていた。自分の見方が他者と変わらないと思いついていた生徒も、みんなの見方がそれぞれであるという事実から、多様な見え方があることに面白さを感じていた。



【資料1 美術鑑賞をしているところ】

ウ 考察

自分とは違う見方や考え方を知ること、自分の考えの幅を広げることができ、互いの意見を認め合うことの大切さを学んでいた。

ソーシャル・ビューの面白さは、「見えない人」の存在から、見えている事への再考を促し、主体的・対話的な活動によって、作品の鑑賞に道徳的な深まりを与えた。

② 2年生理科の実践 「化学変化と質量の変化」

ア 本時のねらい

物質同士を混ぜ合わせる実験を、タブレット端末を場面に応じて適切に活用することで、生徒間の対話・議論の機会や意見発表の場を設けたり、協力して調べ学習をしたりするなど、生徒の活動が中心となる形で行う。そして、その活動を通して互いの考えを尊重し、認め合い、協力することで、学びを深める。

イ 活動の様子

理科の実験活動中の様子をタブレット端末の録画機能を活用し、動画や画像で記録した。実験終了後に各グループごとに行った考察では、それぞれの導き出した結論についてその記録を用いて、説明することができた。また、他のグループと結果を共有する際にも根拠となる場面の記録と共に説明をすることができた。その際、実験結果が他の班と異なっても説明しやすく、その理由を共有することができた。さらに、記録を用いて説明することで一人一人が積極的に自分の考えを述べることができた。全体への発表では、教室に設置してある大型モニターに動画を転送して意見を述べていた。加えてロイロノートアプリを活用することで人前で発言をすることが苦手な生徒でも、自分の意見を文章に表し、共有することができた。

ウ 考察

タブレット端末を活用することで、実験の記録を残すことができたため、それをもとに活発な話し合い活動を行うことができた。また、実験が失敗した場合についても原因を学級で共有することができた。その際に、失敗してしまった班の気持ちを考え、原因をどのように伝えようか、よいかを考えることの難しさも学んでいた。

(2) 体験活動の実践 生徒指導の実践上の視点(1)(2)

① 職場体験学習（2年生）

ア ねらい

実際に仕事をしている人と接し、自分自身も体験することで、働くことの意義や目的の理解、進んで働こうとする態度を育む。また、職業の意義についての基本的な理解・認識、自己を価値あるものとする自覚、夢や希望を実現しようとする意欲的な態度など、望ましい勤労観、職業観を育む。

イ 活動の様子

事前学習から、生徒の主体的な考えを活用して学びを深めた。例えば、マナーについて知りたいという生徒の声を機会とし、マナーについて調べる時間をとった。実習の場面でも、主体的な挑戦の場面を多く得ることができた。例えば、消防署では、実際に働いている方々と同じ服装を着て本格的に活動をしたり、園芸店では、一緒に野菜の袋詰めを行う作業や野菜を摘んだりする体験などから、働くことの責任や難しさ、楽しさを感じている姿が見えた。

事後学習では、まとめの新聞づくりを行った。介護施設を訪問をした生徒の感想には、「職場体験学習で学んだことを生かして少しでもその人により添えられるようになっていこうと思いました」と書かれており、将来に向けて自分なりに今から頑張れることを考え取り組もうとする気持ちが感じられた。



【資料2 介護の説明を受けているところ】

ウ 考察

職場体験を通して、現場の職員と関わり、実践することで、働くことの意義や目的、責任感を理解し、自分から進んで働こうとする意欲や態度を育むことができた。またマナーについての事前学習をしたことで、時間を守ること、大きな声であいさつや返事をする、丁寧に仕事に取り組むこと、皆で協力することなどは、社会に出て働く上でも大切なことであると認識することができた。

さらに、事後学習では、「体験をしてみると想像よりも仕事の内容が大変だと感じたが、大変なことに取り組んだ分、達成感を得られるのが仕事」と振り返っていた。実際に働く姿を間近で見ることができたことでさまざまな職業に対する認識を改め、魅力や楽しさなどを感じることもできた。

② 福祉実践教室（1年生）

ア ねらい

障がいについて知り、誰もが「ふだんの暮らしをしあわせに」するためには、どのように接すればよいか考えることで、違いを認め助け合う大切さを育む。

イ 活動の様子

「点字」「手話」「要約筆記」「車椅子」の体験活動を通して、講師の方々とコミュニケーションをとり、より身近に福祉を感じることができた。全体の講話では、講師の実体験を真剣に聞き、積極的に質問をすることができ、生活の中で困る具体的な場面や、障がいをもつようになってから周りの人々との関係がどのように変化したかなど、深く探究することができた。



ウ 考察

生徒はみな、小学生のときに、同様の福祉実践教室を経験している。当時学んだ車椅子の押し方や手話の指文字などの方法は覚えていても、福祉において大切な考え方などについて答えことのできる生徒は少数であった。そのため、事前学習として、障がいをもつ方の生活のドキュメンタリー映像などを活用し、現実の社会で生きることについて考えた上で体験に臨んだ。

体験講座の講師の方々とコミュニケーションを積極的に図ろうとする意欲的な姿が見られた。例えば、手話の体験講座では、「聴覚に障がいをもつ方は、目覚まし時計の音なしでどのように時間通りに起きるのか」といったような、生活に密着した質問を多くすることができ、生徒の障がいや障がいをもつ方に対する理解が深まった。

(3) 『YDK（やれば・できる・北中生）プロジェクト2』の実施

生徒指導の実践上の視点(3)(4)

① ねらい

各委員会において、自他を大切にすゝる気持ちや豊かな心を育むことのできるプロジェクト（一週間限定）を立案・実施することで、生徒同士の人権意識を高めたり、自分たちの思いや考えをもとに、よりよい自己決定ができる能力を身に付けたりすることができるようにする。

② 活動の様子

委員会活動の時間を使って、委員長・副委員長が話し合いの中心となり、YDKプロジェクト2の内容について案を出し合った。自分たちに何ができるかよく考え、具体的な内容や行う時間帯について進んで計画を立てることができた。以下は、各委員会で決まったYDKプロジェクト2の内容である。

委員会名	プロジェクトの内容	給食	最強時短朝ごはん
執行部	Thank you カード	広報放送	YDKプロジェクト2のポスター製作、人権ラジオ
保健体育	しりとりの法則	生活	あいさつ運動
図書	人権にまつわる本の紹介	環境園芸	校内美化活動

ア 環境園芸委員（校内美化活動）

普段の清掃活動の域を超えて学校をきれいにする活動を通して、豊かな「こゝろ」と「からだ」を育てるために、校内美化活動を行った。コロナ前は、地域交流活動として行っていた校区美化活動の規模を縮小して行われるようになった校内美化活動は、例年、行事前に行われることが多いが、今年度は、学校訪問に伴い、お客様を学校に気持ちよくお迎えするための準備の一環として行った。自分たちにできる最大の「おもてなし」の意気込みで活動することができた。活動の前後で変化を比べ、成果を視覚的に捉えることもできた。一箇所に大量に集まったゴミ袋を見て、小規模校ながらに大きな成果をあげられた充実感が生徒の自己有用感を育むことにつながった。



【資料4 学校中から集まったゴミ袋】

イ 保健体育委員（しりとりの法則）

委員によるオリジナル動画を視聴し、やり方を理解したあとに、ペアになり、自分の推しについてしりとりに遊びと同じ要領で、相手が話した言葉を拾いながら次の会話を広げていく活動を行った。相手の言葉をしっかり受け止めて会話を続けることができていた。「今までは途中で会話がとまってしまうことがあったけれど、これだと続いていいなと思った」「自分の好きなことや、相手の好きなことがたくさん知れて、盛り上がれてすごく楽しかった」など、相手の話をよく聞こうという気持ちをもって会話をするを心掛けていた。



【資料5 しりとりの法則を使って会話】

ウ 生活委員（あいさつ運動）

豊かな人間関係を築くために、進んであいさつを行うことを目的に、生活委員で見本となるあいさつの動画を作成。動画を視聴し、よいあいさつができた生徒には「あいさついいねカード」を渡した。その結果、より多くの生徒がもっといいあいさつをしようと生徒たちの中で意識している姿が見られた。また、生徒同士のコミュニケーションが生まれ、とてもよい雰囲気であいさつを交わす姿が見られた。



【資料6 あいさついいねカードを渡す】

エ 広報・放送委員(人権放送・人権ポスター)

人権とは何かを説明したり、人権に関わるクイズなどを交えたりしながら、給食放送で全校生徒に向け、毎日10分という短い時間だったが、委員の生徒が自分たちで調べたことを聞いている生徒に分かりやすく紹介することができた。また、人権ポスターを作成し、各クラスで掲示することで、それぞれの個性やよさを皆で認め合おうとする気持ちを高めることができた。

③ 考察

月に一度しかない委員会活動の中で、生徒たちが主体となってアイデアを出し、人権意識を高めることができるような取組を考えることができた。各委員会で生徒らが考え、決定し、実行するといった体験を通して、どの委員会においても、学校のため、皆のために「やろう」という挑戦の気持ちをもって取り組む姿が見られた。その結果として、「やればできる」という自己肯定感をもつことにもつながったと考える。また、プロジェクトを通して、自分たちの考えを他者に伝える方法を模索し、他者の思いも大切にしようとする態度を養うことができた。人権尊重について理解を深め、これからの学校生活の中で生かしていこうとする態度を育むことができた。

7 成果と課題(成果:○ 課題:●)

- 豊かな心を育成するためには、体験的に活動できたり、生徒同士で工夫し合う活動を取り入れたりするなどの工夫の重要性を感じた。例えば、校内美化活動のように、活動の前後の変化が分かりやすく、生徒一人一人が気付きながら活動できることと、成果を感じられる活動であれば、普段の生活の中でも実践していこうという意欲をもたせることができると感じた。
- 各教科の授業において、ペアやグループ学習などの協働的な学びを取り入れたことで、自信をもって自分の考えを伝えたり、相手の気持ちを共感的に受け止めたりするなど、互いを認め、高め合うことができた。音楽科の授業では、各パートの練習の中で「互いに高め合うためには、自分の考えをただ押し付けるのではなく、無理のない範囲で相手に考えを伝えていくことが、無理のない音域のパートへ辿り着くきっかけになることもあるので、時には必要である」という考えに辿り着いた生徒もいた。これらの活動から互いの考えや価値観の違いを認め合い、相手を尊重する意識を高めることができた。
- 体験活動では、人によって考え方やものの捉え方はさまざまであることを理解することができた。互いのよさや違いを認めることで、豊かな心を育み、自分や他者を大切にしようとする気持ちをもつことにつながった。職場体験学習で「保育士という仕事は本当に大変だけど、楽しさやうれしさが勝ってしまう、本当に魅力的な仕事だ」と感想を書いていた。このように、物事を肯定的に捉え、夢や希望を実現させようとする意欲的な態度や豊かな心を育むことができた。
- YDKプロジェクト2では、全校で人権意識を高め、幸せの輪を広げていこうというねらいのもと、集団生活における問題点を見付け、解決しようとする態度や、集団生活の向上に進んで貢献しようとする奉仕的精神を育てることができた。

また、委員会活動という異学年交流の特性は、人と人とのつながりの大切さを学び、互いを尊重し合いながら、よりよく生きていこうとする態度を身に付けることにつながった。
- 各教科における実践では、ペア学習やグループ学習を今後も継続的に進めていくことが自分の思いを発信し、他者の思いも大切にしたい生徒の育成に有用であると感じた。
- 人権教育を推進していくために、実際の生活の中で体験的な活動を繰り返し行うようにするための時間の確保が必要であると感じた。
- 今年度については、これから学校祭(体育祭)や野外教室などの学校行事を控えている。それらの活動における生徒の様子を経過観察したり、活動の前後における生徒の変容をまとめたりしながら、来年度に向けての課題や手立てを探っていきたい。